



左が王瑩、右が江青（当時の芸名は藍蘋）



中央が王瑩、右が江青

王瑩（1913- 1974）は文革中の1967年、冤罪で逮捕・投獄された。これを指揮したのは女優時代に王瑩と同じ映画に出演したこともある江青で、江青は文革を利用して、自分の過去の汚点を知る演劇関係者を逮捕し、新中国建設に貢献した多くの文人や演劇関係者が犠牲となった。王瑩は獄中で胃を悪くし、麻痺の症状が出てほとんど話すことができなくなり、1974年3月3日に獄死した。薬物を盛られたせいではないかと言われている。

## 王瑩を偲んで

寒気を感じるとすぐに激しい雨となり、霜の季節に臨んで菊は開花した。①

この二句をもって文壇が遭遇した10年間の災難、文芸隊が経験した凄まじい世の変転を形容しても、少しも大げさではないと私は思っている。だが、第四回文代会（中国文学芸術界聯合会代表大会）がとどこおりなく開かれ、私たちの百花が再び蕾をほころばせようとしているのを、そして文学者や芸術家がこれまでと変わらず堅固であり、新しい力が成長していくのを、ああ、あなたは見ることはないのだ。

それなのに私は、文代会の会場で、忘れ難き人たちの姿を、探して、探して、探しつづけた。いったい彼らはどこにいるのだ？ 彼らはここに来ていないのか？

そうなのだ、彼らは永遠にここに来ることはできないのだ。彼らは八宝山②に眠っている、果てのない平原に眠っている。敬愛する周恩来首相、陳毅、郭沫若、田漢、王瑩……彼らはみな国家のため、人民のために力を尽くし、一生を捧げ、素晴らしい才能を捧げた。それがどんなに巨大な貢献であったことか。そして、彼らを失ったことがどれほどの大きな損失であることか！ こう考えるとこらえきれずに涙があふれ出てきて、私は深く思い出の中に沈んでしまった！

①右派闘争で知識人が批判されはじめるのを寒さにたとえ、文革を雨にたとえている。原文は「紅雨」で紅衛兵の暗喩。第四回第四回文代会は文革後の1979年、の霜の季節に臨んだ10月30日から11月16日まで開かれた。

②八宝山……北京西郊外にある共同墓地。国家建設の功労者の墓地もある。

空が晴れ渡っているある日の朝、私は悲しい心を抑えることができず、病の癒えたばかりの心臓のことも連日の疲労も顧みず、杖をついていてよろよろしながら北京動物園のバス停まで歩き、直接香山へ行く快速バスに乗った。親友王瑩が住んでいる香山に彼女に会いに行くのだと思うと、かつてそうだったように、胸の中が熱い気持ちでいっぱいになった。いや、正確には、今回は彼女を弔うために彼女の墓に行く、と言うべきなのだ！

バスは香山に到着した。私はいつもの習慣で周囲を見回した。バス停はもとのままだったが、私を待っているはずの王瑩の姿はそこにはなかった。私は悄然としながら謝和庚を訪ねることにした。彼はしょっちゅう病気になり、家にとじこもり外には出ず、今は姉といっしょに暮らしていた。

石炭廠街にある家に入っていくと、両方の生え際の髪が白くなっている謝和庚(王瑩の夫)がちょうど体操をしているところだった。私は彼に声をかけた。彼はすぐに振り返って、予期せぬ私の登場に喜びの声を上げた。私は彼に、王瑩の墓に参りに行くために来た、午後には戻らなければならない、と訪問の目的を告げた。彼は道が悪いので山には登らないほうがいいと制止したが、私は聞かなかった。すでに決心していたのだ。彼はしかたなく私を案内していくしかなかった。

石畳の大きな道を通り抜け、真っ赤な紅葉が生い茂り、石の隙間から野菊がまっすぐに茎を伸ばして咲いている、でこぼこした小道を歩いていった。通行人はほとんどなくあたり一面静寂に覆われたもの寂しい景色で、まるで倪雲林③の筆になる晩秋図のようだった。枯れ葉を踏みながら歩き、高さ二十メートル足らずの丘の下に出た。

③倪雲林(1301~1374) …… 江蘇・無錫出身の元代末期・明初期の文人画家、詩人。

私は丘の頂上を仰ぎ見た。こんもりとした松林に覆われ、高くもなく陰しくもないが豊かな緑があった。謝和庚が、この山は有名な京劇役者梅蘭芳が生前にここを自分の眠る場所にすると決めたので梅山と呼ばれるようになったのだ、と教えてくれた。梅蘭芳が亡くなるとこの山に埋葬され、同じく京劇俳優馬連良もここに埋葬された。王瑩のお骨もここに埋葬された。ここは間違いなく芸術家の墓所となったのだ。

私は謝和庚の後ろから、話を聞きながらかなり苦労しながら坂道を上っていった。山の中腹まで上ったところでもう無理かもしれないと思ったとき、石が散らばって置かれている前で謝和庚が立ち止まった。私は急に立ち止まることができず、あやうく転んでしまうところだった。

「王瑩はここに埋葬されています！」 乱雑に石が置かれている場所を彼が指さして悲しそうに言った。私は驚いて茫然とした。杖で石をたたき尋ねようとしたが、興奮してすぐにことばが口から出てこなかった。

「これが、これが墓なの？ 墓碑もない！」

謝和庚は私がとてもつらそうにしているのを見て私を支え、石の前に座らせてくれた。それからゆっくりと説明しはじめた。

1974年3月3日、王瑩は四人組の拷問を受け、無念の思いを抱いて亡くなった。亡くなったその日、家族に知らせることなくすぐに火葬された。この過程にはどのような陰険なからくりが隠されているのかは、捜査を待たなければならない。

当時、彼も巻き添えになって投獄され、出獄してはじめて王瑩が亡くなったことを知った。彼は王瑩の骨灰を受け取ってきたが、墓を建てる勇気がなく、ただ簡単に埋葬することしかできなかった。そしていくつかの石を乱雑に積み上げて置いて目印にした。四人組が粉碎されたあと、今年になって北京映画製作所が彼女の名誉回復をして冤罪を晴らし追悼会を開催した。だがまだ石碑を買うことができず、石に名を刻める者もない。

彼の話聞き、目の前のこの荒れた光景を見て、私の心は粉々に砕けた。私は乱雑に積み重ねられている石に向かって飛びつき抱きしめ、激しく泣き叫んだ！信じられなかった。封建勢力、日本の帝国主義、反動派、それらに向かって勇敢に戦いを挑んだ一人の人間が、このような無念の思いを抱えて倒れることになるとは。彼女の一生がこのような悲惨な結末を迎えることになるとは。

「彼女には子供がいませんでした。死亡診断書には名前ではなく、ただ監獄での囚人番号6472と書かれていました。」

私は沈痛な思いで彼女の名を長いこと叫びつづけた。そうすれば、乱雑に置かれている石の間から彼女が再び姿を現わしてくれるかもしれないと心から念じて。そして18年前のように、彼女が私の腕をとり、二人で肩を並べおしゃべりをしながら香山を散歩する。彼女は昔の話をしてくれて、私は古典詩を朗誦して聞かせる。だがこれらはすべて幻想だった。すべては過ぎ去ってしまい何も残っていなかった。残っていたのはただ、決して忘れることのできない思い出だけだった。

王瑩は三十年代の優れた女優であり才能ある作家である。

彼女は少女時代に封建的な家庭に叛逆し家を出て、女性の自由獲得のための道を進みはじめた。親戚の援助を受け、安徽省の蕪湖市から転々としながら上海まで逃げ、その後、復旦大学、海芸術大学、中国公学<sup>④</sup>で学んだ。1930年からは「復旦劇社」の主演級役者となり、その後党指導による進歩的劇団や、上海劇社、辛酉劇社、四十年年代劇社、明星映画会社、電通映画が製作した映画で主演を果たした。

④中国公学……1906年に上海で創立された中国最古の大学。合併・吸収を経て現在は西南財経大学に組み込まれている。

彼女が出演した映画の作品は多くはない。陽翰笙脚本による『女性的吶喊(女性の喚声)』『鉄板紅涙録』と、夏衍脚本による『同仇』『自由神』の四作だけである。だがこれらの映画は内容が新しく、思想を含んでいない当時の商業映画の枠からはみ出ている、映画史上に一定の進歩的な影響を与えた。

しかし彼女は、映画界における腐敗と長年の悪しき慣習に適応することができず、1934年に一大センセーションを巻き起こす散文『冲出黑暗的電影圈(暗黒映画界からの脱出)』を書いた。発表してすぐに日本に勉強に行った。日本でも反動勢力の妨害を受け安心して学業に励むことができず、翌年に帰国、演劇活動を再開し創作活動を続けた。私が彼女と知り合ったのはこのころである。

1937年3月間、王瑩は南京で夏衍脚本による『賽金花<sup>⑤</sup>』の公演をした。当時は全国民が抗日戦を叫んでいて、『賽金花』の内容には投降への反対と国民党の圧政を批判する内容が含まれていた。それで国民党の文化部関係の指導者張道藩の命令で舞台上に物が投げ込まれ、舞台は大混乱となった。その中で王瑩は演技を続け、その勇氣は友人たちに称賛された。間もなく七七事変が起こり、日本の侵略の炎が中原に広がった。

国を愛する情熱の火が王瑩の中で燃え上がった。彼女は洪深が率いる救亡演劇第二隊に参加して上海、河南、武漢と転戦した。武漢では抗日戦の宣伝活動に従事し、私といっしょに、抗日戦を支援に来ているソ連空軍の慰問に参加した。彼女が彼らのために歌を歌ったことを覚えている。そのあと、彼女は徒歩で演劇団といっしょに、深い山を越え危険をものともせず作戦区域に行き、民衆を鼓舞し、組織し、教育するために巡回公演をした。同時に彼女は何篇かの脚本を書いた。『台兒莊園戦（台兒莊の戦い）⑥』は彼女と夏衍の共作である。

⑤賽金花……実在の人物賽金花(1874-1936)をモデルにした演劇。妓女だった賽金花は官僚の側室となってドイツに赴き、義和団事変で八か国連合軍を率いていたドイツ軍将校と折衝し、北京市内での連合軍と市民の衝突を回避した。1930年代には反日戦争が始まると、彼女の行動が愛国的なものとして象徴されるようになり文学作品の題材となった。

⑥台兒莊の戦い……1938年3月から4月7日まで、山東省の台兒莊付近で行われた日本軍と中国軍の戦闘。中国軍の大部隊に包囲されて日本軍は撤退した。

1939年、戦局の変化に対応するため、演劇第二隊は「新中国劇団」と改名した。そして彼女と金山⑦に率いられ、香港や東南アジア一帯の華僑に対する宣伝公演を行い、抗日戦支援のための寄付金集めを行った。日本が東南アジアを侵略しはじめると活動は困難に陥り、彼女は変装して中国に戻ってきた。それで武漢で別れた私たちは四川で再会を果たしたのだ。私たちが集まったり離れたりしながらも、祖国を救うために闘いつづけるという共通の目標を持っていたので、私たちの心は常に連なっていた。

⑦金山(1911-1982)……俳優。妻で女優の孫維世は周恩来の養女で、文革中に江青によって逮捕・投獄され獄死した。彼自身も7年間投獄された。

1942年の晩春、私は重慶から百里（50キロメートル）離れている北碚に住んでいた。王瑩はわざわざ私に会いにきて、私の家に泊まった。私が住んでいたのは小さな建物の二階で、三階には女流作家の沉櫻が住んでいた。彼女と王瑩は復旦大学時代の同級生で、彼女たちも久しぶりの再会だった。北碚は周囲を山に囲まれたところで、嘉陵江沿いの緑の帯のような道を上がっていくと北温泉と縉雲山がある。私は王瑩に付き添ってこれらの名所を遊覧した。彼女は北温泉がすっかり気に入り、私たちは彼女が休養をとり、はるか遠くへの旅行——アメリカへの留学準備ができるようにと、最も優雅な“竹楼”という名前が付けられている小さな家を借りて住んだ。

数日後、私たちが北碚に戻った。だが、私が住んでいたところを見張るために国民党が突然十数人の私服の憲兵のスパイを派遣するとは考えてもいなかった。王瑩が外国(日本)からやってきたためにスパイ容疑がかけられたのだ。そのうえ彼女は共産黨員だったから、監視がどうしても必要だった。その時私はかなり緊張した。彼女が重慶に帰れなくなり、出国に間に合わないかもしれないと心配した。しかし彼女はまったく気にならないようすで、泰然自若として窓からスパイたちが街を歩くのを眺めていた。しかし心の中ではひそかに対策を思案していた。彼女は私に、「この状況を回避することはできない。回避しようとすればするほど彼らの疑いを増すことになる。だから彼らに面と向かって対峙するしか方法はない」と言った。

彼女の言うことはもっともだと思った。彼女は闘争の経験が豊かだ。そこで私たちは毎日友達に会いにいき、散歩を楽しんだ。彼らをまったく相手にしていないようにふるまった。私たちが外出するたびに、彼らを慌たたく動き、私達を尾行した。まるで護衛部隊のように、わずかも私たちから離れなかった。

「ねえ、私たち、鼻が高いわね。こんなにたくさん用心棒を雇っているなんて」と、あるとき王瑩は私に向って大声で冗談を言った。

私は何も言えなくて、ただ苦笑しながらうなずいていたが、心の中では彼女が災難に巻き込まれるのではないかとほらはらしていた。しかし、意外なことにスパイたちは少し恥じているような表情を見せた。彼らも、自分たちが愚かなことをしていると意識したようだ。たった二人の若い女のために大の男が十人以上も動き出すのだ！そこでだんだんと彼らの姿が見えなくなった。

王瑩の肝っ玉の太さと緊急時の対処の腕前には感心しないわけにはいかない。特に彼女が重慶に帰る日、汽船上で彼女はみんなを驚かせる行動をとった。同じ船に乗っている、一目でスパイだとわかる者たちの前にいき挨拶をして、まるで普通の友人のように、大いに抗日救国の道理を話したのだ。スパイたちはまったくの無関心を装っていたが、このとき私は奇妙な感じがした。彼らが「スパイ」として監視しているこの大胆不敵な人間も、つまるところ同じ愛国者じゃないか？！

重慶に着いてスパイの数は減ったが、依然として至るところで尾行する人間が目に入った。だが、どんなにがんばったところで彼らは才知に富む革命者の相手ではなく、王瑩と謝和庚は悠々と安全に中国を離れた。二人が去った後私は北碚に戻ったが、憎たらしいことにスパイたちはそれから私に数日間はりついてた。王瑩がまだ私の家で隠れているかもしれないと思っていたのだ。あとで画家の徐悲鴻と話したときに

わかったのだが、彼も同じ目に遭っていたようだ。王瑩が彼の見舞いに行ったことがあり、それでスパイたちが彼を煩わせたということだ。

アメリカに行ったあと王瑩の経済状況は非常に悪くなった。私はひどく心配したが手の打ちようがなく、手紙を書いてどうしたらいいか徐悲鴻<sup>⑧</sup>と相談した。彼が返事を寄こした。「必ず彼女を支援しなければならない。自分は絵を売ることができる。君は文を売ることができる。」

⑧徐悲鴻(1894-1953)……中国近代絵画の画家。欧州留学後、1935年に帰国し、中華人民共和国が建国されてからは中央美術学院長になった。

この手紙を私は何十年も大切に持っていたが、「十年の災難(文革)」のとき家財が略奪されたとき持って行かれてしまった。まだ覚えている。私が王瑩にその手紙を見せたとき、彼女は笑って言った。「あなたたちってほんとうに無邪気ね。一枚の絵、一篇の文章がいくらになると思っていたの？」そのとおり、焼石に水で、どれほど彼女を助けたくても私たちにはその力はなく、彼女の窮状を救うことはできなかった。

それから3年後、日本が投降する前後の重慶では物価の高騰が激しく、人々は安心して生活できない状況だった。私にはいつも病気がまとわりついていたので、さらに生活は苦しかった。

ある日のこと、突然一人の友人が、あちこち尋ね歩いて私のところへやってきて、小さな紙包みを手渡した。アメリカにいる王瑩が、私に渡してほしいと人を介して託したのだそうだ。開けて見ると、中には精緻なつくりの金のネックレスが入っていて、メモが添えてあった。「あなたの健康のため、必要な薬を買ってください。」メモを読み終わると、私の目から涙があふれ出た！「雪里送炭(最も困っている時に援助する)」の情がどうして金や銀と交換できよう。この金のネックレスは、たとえ私が病死しようと売ることなどできない！

新中国が誕生し13年が過ぎ去った年の、春の初め、ある朝、私は事務室で聞き覚えのある声の電話を受け取った。相手は名乗らなかった。私はしばらくだれだかわからなくて困ってしまった。ちょっと黙ってしまうと、相手方は明るい笑い声をあげ叱りつけた。「アハハハ、小鬼(シャオグイ「おちびさん」の意)。私のこと、忘れちゃったの？ 声もわからなくなったなんて！」

この非難のことば、これでわかった。この世で私を「小鬼」と言って非難できるのは、王瑩のほかだれもない。1947年に私が『現代中国女性作家専集』を編集したとき、彼女に原稿を依頼した。彼女は返信でも「小鬼」と呼んでいた。

実は彼女は私より一歳だけ年上だったのだが、彼女のほうが多くのことを経験していて世間のことをよく知っていたので、私は彼女のことを姉のように思っていた。また二人とも幼いころに母親を失い孤独な境遇にいたので、互いに同情し合い共感する部分が多かったのだろう。この感情は二人がどれほど遠くに離れていても薄くなることはなく、どのような時でも忘れることはできない！

「ええっ、帰ったの、王瑩！ どうして前もって知らせてくれなかったの？」私は狂喜して大声で言った。そしてまるで13年間離れていた友人を抱擁するように、電話をぎゅっと抱きしめた。

「試験しようと思ったからよ。まだ私を覚えているかなって？」王瑩は笑いながら言った。「昨日着いたの。それですぐに電話したの、会いたいわ。いまおじさんのところにいるのよ。」

「わかったわ、すぐ行く。」私は電話を置くとすぐに王瑩に会いにいった。私たちはずっと理想のために闘ってきた。その理想が実現したのだ。民衆を押さえつけていた三つの大きな山がひっくり返った。新しい中国ができあがった！ 王瑩は謝和庚とアメリカで結婚した。彼らは愛し合いとても幸せだった。胸いっぱい情熱を抱え、解放後の母の胸に、国家の胸に抱かれるために帰ってきたのだ！

王瑩は上海に数日滞在した。復旦大学時代の師であり友人だった顧仲彝<sup>⑨</sup>や朱端鈞<sup>⑩</sup>を私に紹介したいと言ったので、一度彼らを食事に家に招いた。それから北京に行き、アメリカでの学習と仕事の成果を報告した。

<sup>⑨</sup>顧仲彝(1903-1965)……劇作家、教育家。復旦大学教授、上海戯劇学院の校長を務めた。

<sup>⑩</sup>朱端鈞(1907-1978)……演劇教育家。洪深の指導の下で復旦劇社に所属。上海戯劇学院で教授、教務長を務めた。

彼女はエール大学に入り文学を専攻し、アメリカで反ファシスト、反侵略戦争を声を大にして訴えた。ホワイトハウスで催された演劇会で一幕劇『放下你的鞭子(鞭をおろせ)<sup>⑪</sup>』の主演を演じ、ルーズベルト大統領と彼の家族や政府の高官、各国大使からその演技を高く評価された。そして中国解放の訴えをし、アメリカの進歩的な人々の関心と共感を得て、中国とアメリカの友好関係を築くことに貢献した。



⑪放下你的鞭子(鞭をおろせ)……陳鯉庭作的一幕劇。街頭劇として創作され、抗日戦線時の愛国主義街頭劇となり各地で演じられた。

この話を聞いた周恩来首相は公の場で彼女を称賛した。1960年7月に香山で行われた映画関係者が参加した宴席では、周恩来首相が直接王瑩のところに行って言った。「あなたのアメリカでの活動はすべて知っています。あなたは実に多くの素晴らしいことをやり遂げました。」周恩来首相はこのように王瑩の働きを認め彼女を激励した。だが一方で、彼女のことを快く思わず、ひそかに打撃を与える機会をうかがっていた者がいたのだ。

1956年に王瑩は北京映画製作所の脚本部に配属された。そのころから徐々に、見えないところから自分に向かって冷たい風が吹いてきているのを感じていたが、表面では気にしていないふうを装い無視していた。1960年の春のなかば、私は北京中国伝統劇学校で体験学習をしていた。ある日王瑩を頤和園の散歩に誘った。私たちは長い回廊をぶらぶら歩きながらいろいろな話をした。

当時夫の謝和庚は「右派」のレッテルを貼られ、北大荒(黒竜江省の未開拓地)で強制労働をさせられていて、彼女は長編小説『二種類のアメリカ人』を書いているところだった。健康状態はすぐれないようだったが、気分はとても高揚していた。彼女を取り巻いている環境は良くなく、国は3年の自然災害の中にあっただ⑫。

⑫実際には自然災害による飢餓ではなく、毛沢東の「大躍進政策」の失敗により生じた飢饉で、餓死者は二年間で国家統計局のデータで四七七〇万人に達したとされている。一般の人々には正確な情報が伝えられていないことが、趙清閣のこの一文から推察できる。この政策の失敗の責任をとって国家主席の座を一時は退いた毛沢東は、最高権力者の座に返り咲くために権力闘争を開始し、青少年で構成された紅衛兵が利用された。

彼女の経済状態はよくないことが私にはわかった。私はいつも持ち歩いていたあのネックレスを取り出し、彼女に返して言った。

「これ、あなたがくれたネックレスよ。20年間ずっと持っていたの。あなたに戻すわ。多分あなたには必要になると思うから。」

私の話を聞くや彼女の顔が赤くなった。彼女のこのような厳しい顔は一度も見たことがなかった。「絶交したいの？ いいわよ。ちょっと待ってて。あなたからもらった指輪を取りに言って戻すから。抗日戦争のときに私にくれたものよ。何かのときに必要になったら使うようにって。でも、私はずっと持っていたの」

私は一言も言わずにネックレスを胸にしまった。王瑩は満足してしっかりと私の手を握った。彼女はきっぱりとした口調で言った。「目の前にどんな困難が待ち受けていようと克服することができる。克服できない困難はない！」

彼女は国家を心から愛していた。文芸界のためにどんな困難にも屈せず創作することを、いかなる逆流も妨げることはできない、と彼女は言い、そのとおりに実行した！中年になった王瑩は穏やかに成熟したように見えた。倦まずたゆまず本を読み学び、創作活動に従事していた、四人組が彼女からペンを奪いとるまで！

文革が始まるとすぐに、王瑩からの手紙を受け取った(最後の手紙を!)。彼女は熱心に私を励ましてくれた。「私たちは革命の荒波の中で鍛えられ、試練を経験しました。それは私たちが革命のための文学者、芸術家だったからです。」(この手紙は紅衛兵に家財を略奪されたとき発見され、王瑩が私に秘密を洩らした証拠だと言われた。)

善良で正直な王瑩、常に進歩を求め積極的に革命に参加していた王瑩。私にこの手紙を書いているとき彼女は、まさか人間の皮をかぶった悪魔が、人に知られないように着々と血に塗れた手を自分のほうに伸ばしているとは、思いもしていなかったことだろう。

1967年7月、彼女は「アメリカのスパイ」「裏切り者」という冤罪で逮捕され、七年間投獄され無残な迫害を受け、亡くなった。名誉回復後に北影(北京電影学院)で行われた追悼会の弔辞には、「王瑩同志が遭った迫害は、裏切り者江青が自ら指揮したものである。」と書かれていた。さらにこうも書かれていた。

「これは王瑩同志が江青の状況をよく知っていたので、王瑩同志の口を封じるために為したことで、江青が文化大革命を口実にし、長年の個人的な恨みを公的に晴らしたものだということには疑いの余地はない。」

真理は歪曲を許さない。歴史は自ら正論を持つ。王瑩の無実が証明され、冤罪がついに晴らされた。思い出は浮き雲のようにさっと過ぎていく。わずかに慰められることもあるが、悲しみをまったく取り払ってくれることは難しい。まさに杜甫が詩に詠んでいるように、「哀戦両決絶、不復同甘辛(悲しい戦争は二度とくり返されてはならぬ、過去の幸せや苦勞は戻ってはこないのだから。)」である。

私は石を拾い集め、彼女の遺灰が埋葬されている草の生い茂っている地面に一つ一つ積み上げて墓石を作り、黄色の小さな菊をいくつか墓前に挿した。

「瑩、安らかに眠ってね！」 私は墓石に向かって深く頭を下げ、彼女に別れを告げて山を下りた。帰り道、私は何度も重い心で梅山を振り返り、そこに眠っている亡き友を思い出した。思いは千々に乱れ、「剪不断、理還乱<sup>⑬</sup>」という状態だった。

謝和庚の家に着くと、彼は私に、王瑩のために二冊の遺作、『宝おばさん（宝姑）』と『二種類のアメリカ人（兩種美国人）』を整えているところだと言った。原稿はすでに完全な形では残っていなかったが、幸いなことに『宝おばさん』はアメリカの進歩的文学者イーダ・プルートの英訳がある。最近彼女は米中友好協会の名誉会長になった。それで自分と王瑩の友情を記念して『宝おばさん』を謝和庚に送ってくれた。この英訳本から謝和庚が中国語に翻訳する、というのだ。

『宝おばさん』は王瑩自身の少女時代の自伝的な内容の小説で、『二種類のアメリカ人』は王瑩夫妻が帰国する前に、サンフランシスコで米国政府によって監禁された経験について書かれている。彼女はその中で、自分たちに優しくしてくれたアメリカの普通の人々と、自分たちに敵対心を持っていたアメリカ人官吏を描き、「二種類のアメリカ人」とタイトルを付けた。

この二つの遺作が現実的な価値を持っているのは確かだ。私は謝和庚に、努力して整理作業を完成してほしいと励ました。これが王瑩にとっての最良の記念となると思ったからだ。彼女は不幸にも亡くなってしまったが、彼女の作品は今の文壇の庭で実を結ぶべきで、四つの現代化を促進するために大きな影響力を発揮するだろう。私は興奮して、「どうか一日でも早くこれらが整えられて世に出ますように。そして、これによって四人組によってかけられた王瑩の冤罪が晴らされ、文芸界における王瑩の最後の貢献となりますように！」と言った。

「あなたの期待に背かないことを約束します！」と、謝和庚も興奮して答えた。

今日は3月8日国際婦人デーで、王瑩の誕生でもある。この一文は、良き友との思い出を懐かしんで書いたものである。

1980年3月8日夜 上海

⑬剪不断、理还乱……南唐最後の王李煜(リユー)の詩で、この後に「是離愁」という句が続き、「断とうとしても断つことができず、抑えようとしても心が乱れてしまう。それが別離の悲しみ、憂いというものだ」の意。

⑭イーダ・プルート (Ida Pruitt)……中国の山東省でアメリカ人宣教師の家に生まれ、19世紀末の農村部中国の村で育った女性。中国近代化の混乱のほぼ一世紀を目撃した。